

聴こえない君たちが、デジタルで創る・学ぶ・つながる！

特定非営利活動法人デフサポートおおさか 副理事長 稲葉 通太

キーワード：聴覚障害 ICT 交流 コラボレーション マイクロソフト 下水処理 地下鉄 バリアフリー

1. はじめに

聴覚障害児童・生徒の学びの場「ぼちぼちEdu」は、2010年にスタートした。当初は算数や国語などの教科学習、工作や調理などが中心だったが、とかく世界が狭くなりがちな聴覚障害児にとってはいろいろな人々と出会い、豊かな関係を築いていく必要性を感じていた。外国の方や他の障害者の方との交流も数多く実施した。その中で、大阪市の下水処理場で働く人たちとの出会いがあった。この人たちは聴覚障害児が下水処理場の見学を訪れた際、仕事内容を自分自身で手話で伝える取り組みをしているのだが、私はその取り組みに共感し、「下水道用語の手話」作りをコラボワークとして行い、それをパワーポイントでデジタル教材にして全国の聴覚支援学校に提供した。

そのICTを活用した教室を超えたコラボワークがマイクロソフト社に注目され、2014年3月にスペイン・バルセロナでの同社主催のICT教育活用世界大会で発表する機会をいただき、同年6月には同社の米国本社から取材を受け、「人と人をつなぐICT活用の先進的モデル」として世界の教育関係者に紹介された。

このような、いろいろな人たちと共同する教室を超えた学びは、学校現場では時間的な制約もあり、困難である。その、学校ではなかなか体験できない学びを「ぼちぼちEdu」ではICTをも活用することによって実践し、聴覚障害児童・生徒が自分を高めていくことをめざしている。

2. 実践の目的

聴覚障害児童・生徒が、ICTを活用して探究したいと思ったことを調べ、まわりに伝わるように創り、それを自分の言葉で発表することによって自分の力を高めていく。

また、大阪地下鉄の運転士チームと聴覚障害者の交通バリアフリーを考えることを通して、いろいろな人たちと共同することのすばらしさを知り、聴覚障害者のバリアフリーの必要性を社会に発信し、社会を変革していこうという気持ちと自信をもつ。

3. 実践の内容

(1) クリエイティブに創る力を育てる

最近タブレットでアプリを使った学びが増えているが、アプリの安易な使用ではクリエイティブに創る力が育ちにくいと考えている。「ぼちぼちEdu」では、メジャーなツールであるパワーポイントを活用している。真っ白いカンバスにテキスト、画像、動画などを入



写真1 創っているようす

れていく感覚で、創る楽しみを感じながら自由に表現している。創ることに集中できるといふ点でこれに勝るツールはないだろう。

(2) 共同して調べ、発表する

ICTは使うことそのものが目標ではなく、使って何を行い、どのような力をつけていくかということを確認しておくことが大事であるが、今回は社会の様々な問題を知って視野を広げていこうと「社会を知ろう！」というテーマで調べ学習を行った。

この取り組みにあたっては友達としっかり話し合っていくことも大事にしたいと考えたので、個人ワークとせず、2～3人のグループワークとした。内容は、地球温暖化、絶滅していく動物の保護、日本とアジアの国々の関係改善、イスラム問題、アニメなどであった。それをパワーポイントにまとめていった。



写真2 友だちと共同で調べ、創る

がんばって創ったからこそ、多くの人たちに見ていただき、評価や厳しい意見を今後糧としたいと思ひ、「デジタルワーク発表会」を開催した。保護者、教育関係者など約100名の方々に見ていただいた。このような場を持つことに対して尻込みする児童・生徒もいたが、「こんなにすごい経験はめったにできない。君たちの力になる」と励ました。発表においてはプレゼンの丸読みをせず、自分の言葉で語るように指導したが、それを意識して参加者に挙手を求めたり、問いかけたりして発表する姿が見られ、うれしく思った。



写真3 デジタルワーク発表会で発表する生徒

(3) 大阪地下鉄の運転士チームとのコラボワーク

前述した下水処理場の方々と同じように、大阪市交通局の地下鉄運転士たちでつくる「チームもぐら」が手話の普及に取り組んでいるのだが、その方々と駅や車内での聴覚障害者のバリアフリーをめざす取り組みを行っている。

聴覚障害者は聴こえないがゆえに必要な情報が得にくく、日常生活において様々な困難があるのだが、阪神淡路大震災から20年たった今もほとんど改善されていない。交通機関の利用においても、アナウンスの

内容がわからなかったり、駅員さんとのコミュニケーションがうまくできず右往左往する状況がよくある。このような状況を改善しようと、「チームもぐら」と駅や車内での情報保障、災害時の対応などについて共に考える場をもっている。



写真4 地下鉄運転士たちと考えあう

また、楽しい取り組みとして、大阪地下鉄の看板路線である御堂筋線の駅名の手話の由来を運転士と聴覚障害児童・生徒が手話で漫才調でやりとりし、それを動画にして発信したが、多くの反響があり、手話の普及にもつながっている。



写真5 運転士との手話でのやりとり動画

4. 成果

デジタルワーク発表会では、どの児童・生徒の発表プレゼンも個性豊かで、内容も参加者が驚くものであり、私を含めスタッフもうれしく思ったが、もっとうれしかったことがある。

実は、「ぼちぼちEdu」に来る聴覚障害児童・生徒たちの能力はさまざまであり、別の障害を併せ持つ生徒もいるのだが、「社会を知る！」というテーマの発表会であるのに、その生徒がこだわったのは「アニメ」であった。それを見て、他の生徒たちは冷めた様子だったが、スタッフはアニメを「社会を知る！」というテーマに結びつけられないものか、その生徒と時間をかけて話し合った。その結果、アニメと関連づけて、アニメに字幕が付くようになってから聴こえない自分もアニメが楽しめるようになった、もっと聴覚障害者に対する文字情報の保障を求めていかなければならないという、一つの「社会を知る」という内容になった。また、「アニメの主人公は失敗を恐れないが、私はどうなのだろうか？」という発表にもなった。

このような発表になったのもうれしいのであるが、後日、別の生徒が「僕は、あのグループがアニメなんかについて発表すると知って、やっぱりダメなんだなあと思ったけど、自分のことにつなげて発表していた。友だちを見下げていたことを恥ずかしく思った」と言ってきて、涙がでるほどうれしかった。私たちは「仲間を大事にし、ささえあおう」ということも常日頃から言ってきたが、それが実感できた言葉であった。

また、地下鉄運転士チームとのコラボワークでも、将来の夢は電車の運転士という聴覚障害生徒もいるのだが、その夢の実現のためにどのように支援していけばいいのか、運転士チームも悩みながらも考え始めている。

5. 今後に向けて

「ぼちぼちEdu」は単なるパソコン教室ではない（障害を持つ児童・生徒に対するパソコン教室自体が日本ではまだまだ希少なのであるが）。下の図1にあるように、海外の主体的・自主的なICTの学びの形を積極的に取り入れている。この形をいかに充実させていくかが課題である。

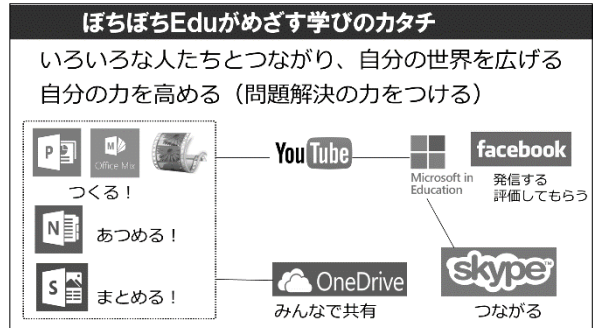


図1 ICTを活用した学びのカタチ

また、社会のいろいろな人たちとの共同したコラボももっと広げていきたい。「ぼちぼちEdu」の中には自分の障害を否定的にとらえている生徒もいるが、いろいろな人たちとの共同の経験を重ねることによって、障害者である自身を誇り、まわりの人たちと豊かな関係をつくり、多様な人たちと共生していこうという気持ちに変わっていくものと確信している。そのためには、私たちスタッフもそのための環境をもっとつくっていかねばならない。



図2 いろいろな人たちと共に...

最後に、デジタルテクノロジーはしっかりした目的と理念を持って使っていけば必ず障害者のアクセシビリティを促進していくものと信じている。私たちのICT活用の理念は、「人と人とがつながるためのICT」「壁を打ち破り、夢を実現していくためのICT」。この理念を大切に今後聴覚障害児童・生徒たちとともに歩んでいきたい。

参 考

マイクロソフト社が私たちの取り組みを動画にまとめてくださっています。

日本マイクロソフト 教育機関の皆さまへ

→ 導入事例 → 大阪府立生野聴覚支援学校

<https://www.microsoft.com/ja-jp/education/showcase/ikuno.aspx>